

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：33929

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K11452

研究課題名（和文）スポーツにおける人間の生の経験を生かした高等教育における身体教育の意義と価値

研究課題名（英文）Significance and value of physical education in higher education using our vivid human experience in sports

研究代表者

畑 孝幸（Hata, Takayuki）

東海学園大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：00156332

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、スポーツ実践における人間の生の経験が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ち、大学体育における人間形成の可能性について検討した。スポーツ実践における多様な生の経験を大学教育における人間形成の営みに取り込むことで、大学体育が直面する問題解決への方策を提示しつる新たな体育論の構築を目指した。その概要は以下のとおりである。大学教育において「社会の変化と呼応する『身体』及び『身体性』とは何か」について考察した。大学生が身につけるべき身体に関するリテラシーを大学教育の中に位置づける必要性を明らかにした。「高等教育で必要な『身体的リテラシー』」について明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的・社会的意義は、高等教育において「社会の変化と呼応する『身体』及び『身体性』」について考察したこと、「大学生が身につけるべき身体に関するリテラシー」を如何にして大学教育の中に位置づけるか、それを高等学校までの教育と大学教育を対比させながら考察したこと、そして「大学生の体力と身体的リテラシー」に関する研究の枠組みを完成させるべく「高等教育で必要な『身体的リテラシー』」について考察したことである。その社会的意義は、スポーツ実践における身体的リテラシーの観点から大学体育を考察することによって、その意義を明らかにしようとしたことである。

研究成果の概要（英文）：This study examined the possibility of human development in university physical education, based on the recognition that the lived experience of human beings in sports practice is inseparable from the question of human existence. By incorporating the diverse lived experiences of sports practice into human development in university education, the study aimed to construct a new theory of physical education that could offer measures to solve the problems faced by university physical education. The outline of the project is as follows. (1) The paper investigated "what is the 'body as we' and 'physicality' that responds to changes in society" in university education. (2) The need to position literacy about the body that university students should acquire in university education was clarified. (3) Clarified "the 'physical literacy' needed in higher education."

研究分野：体育学、体育・スポーツ哲学

キーワード：身体教育学 高等教育 身体的教養 身体リテラシー 人間形成

## 1. 研究開始当初の背景

平成3(1991)年に大綱化された大学設置基準により、高等教育における一般教育科目・外国語科目・保健体育科目・専門教育科目という科目区分と単位数が、各大学で自由に設定できるようになった。これを契機に多くの大学で、一般教育科目や外国語科目とともに、保健体育科目の改革が教養部(教養課程)の改組に合わせて行われた。これまで大学設置基準によって卒業要件の一部として存在した保健体育科目は、多くの大学で卒業に必要な必修科目から外れ、その単位数が削減された。

このような改革に際して大学体育では、「目的や目標に対して内容や方法が適しているかどうか」「内容・方法が目的・目標に対して有効な働きをしているかどうか」といったことが問われなければならなかったはずである。にもかかわらず、多くの大学では従来の「体育」の目的や目標を大幅に変え、科目名を「健康」や「スポーツ」を冠したものに變更してまで、大学生に自立的な健康生活を維持するための方法を身につけさせようとした。そこには大学教育の目的や目標から大学体育を位置づけるという発想がなかったといっても過言ではない。そのため「大学の体育は、高等学校までの体育とどこが違うのでしょうか」という批判がなされるという事態が今なお続いているのである。

日本学術会議(2010)は「一般教育(外国語教育および保健体育を含む)は、教養教育の中核的な部分として、すべての学生が学修する「共通基礎教養」として位置づけられると同時に、一定の広がりや総合性を持つものであることが重要である」と提言している。また、UNESCO(2015b)は「身体活動の継続とスポーツの実践は、グローバルで民主化された教育によって生涯を通じて保障されなければならないこと」を定めている。このように、これからの大学は、身体活動やスポーツに関する有効なプログラムを積極的に開発し、人間の身体面からの幸福を追求する社会の発展に寄与していくべきである。高等教育においても身体活動やスポーツを実践する機会を保障し、身体活動やスポーツに関する文化的社会的課題に対応する身体的教養を涵養するプログラムを提供する義務があると思われる。

## 2. 研究の目的

本研究では、大学での教養教育において、大学生の「心と体」の教育が人間的な存在への問いと不可分だという認識に立ちながら、高等教育における身体教育の意義を「身体的教養」の涵養に求めて、大学教育における体育の可能性を探ろうとした。大学体育の中心的な教材となるスポーツでは「自己への問いかけ」や「他者との交流」から得られる多様な生の経験を得ることができる。本研究は、この多様な生の経験を身体教育という人間形成の営みに取り込むことによって得ることのできる「身体的教養」について考察しようとした。その目的は、大学における身体教育の意義を改めて確認するために、大学生の「心と体」の教育が人間的な存在への問いと不可分であるという認識に立ちながら、大学生が身につけるべき教養の一つとして「身体的教養」を位置づけることによって、高等教育におけるスポーツ実践の価値を明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

本研究は、「身体的リテラシー」「身体の経験」「身体的教養」という三つのキーワードを設定し、3年の期間を設けて行うよう計画された。1年目の令和2(2020)年度は「高等教育で必要な『身体的リテラシー』」について考察した。2年目の令和3(2021)年度は「スポーツ実践における『身体の経験』」及び「大学体育におけるスポーツ実践の価値」、さらには「大学教育における人間形成」について考察した。3年目の令和4(2022)年度は「大学の教養教育で培う『身体的教養』と体育の意義や価値」の考察を中心に据えて研究を進めた。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

大学体育の何が問題なのか。大学における体育が現在のような事態に陥った背景には、以前から大学体育への批判は存在していたことがあげられる。大学体育に関する先行研究の成果を洗いなおし、新たな資料にもあたり、大学体育の何が問題なのかということを確認にした。現在のような事態に大学体育が陥った背景には以前から大学体育への批判が存在したことが明らかになっている。増田(1987)は「...大学の体育 特に『実技』は、現実にその目的・意図のもとに行われているか」(p.20)という問を投げかけ、「大学の体育を必須とすることを廃止し、その教官を小学校の体育教師に配置することが、大学体育が掲げている目的を達成する近道ではないだろうか」(p.21)とまでいっている。これに対して小林(1988)は「それは人間の成長・発達の様子を正しくとらえていない人の見方である。...大学の教養課程の短い期間に、これ程までの

成長をするものかと驚かされるのである」(p.57)と述べ、体育『実技』の授業の重要性を説いている。大学における体育は、その理念や必要性は原則的に認められていたのだが、それを具体的に実現するための内容や方法 特に『実技』の内容や方法 が問題視されていたのである。スポーツを実践することの人格形成的意味やスポーツの教育的価値を再確認する必要のあることが明らかになった。

大学体育の課題は何か。2017年の中央教育審議会大学分科会の『今後の各高等教育機関の役割・機能の強化に関する論点整理』では、「高等教育においては、知識・技能を学んで修得する能力だけでなく、学んだ知識・技能を実践・応用する力、自ら問題の発見・解決に取り組み、多様な他者と協働しながら、新たなモノやサービスを生み出し社会に新たな価値を創造する力を育成することが不可欠」と指摘されている。そして「新たな価値創出の基盤となる創造的な教育研究の高度化」及び「社会の変化、地域や産業界の多様な要請を踏まえた実践的な教育の充実」が掲げられている。また、日本学術会議からの提言『21世紀の教養と教養教育』(2010年)においては、「一般教育(外国語教育および保健体育を含む)は、教養教育の中核的な部分として、すべての学生が学修する「共通基礎教養」として位置づけられると同時に、一定の広がり」と総合性を持つものであることが重要である」と示されている。

体育系学術団体からの提言『21世紀の高等教育と保健体育・スポーツ』(2010年)では、「学生の健康・体力の維持・向上」、「大学における保健体育の教育効果」、「スポーツ権の尊重」、「『学士力』に心身の健康を位置づける」といった4つが提言されている。こうした提言がなされるのは、現代社会における人間の「動く」機会の減少、それに伴う運動不足等による生活のための体力の低下といった問題に対して、日常生活におけるスポーツや身体運動などの意図的に動く機会を組み込む工夫の必要性、スポーツや遊びの価値(自己を開放し他人との人間的関係を構築する貴重な経験の場を与えてくれること)の重要性等の課題が重視されていることの証である。

これらの課題は高等教育における身体教育こそがなし得る事柄である。すなわち、身体教育は知識・技能を学んで修得するだけでは不十分であり、学んだ知識・技能を実践・応用する力を学べ、自ら問題の発見・解決に取り組み、多様な他者と協働しながら、新たなモノやサービスを生み出し社会に新たな価値を創造する力を育成することができると考えられる。

## (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で得られた成果のいくつかは、国内外における学会大会で発表され、その一部は学術研究誌にも掲載された。公表された研究成果は、人間の生の経験という新しい視点からスポーツを捉えたうえで、このように捉えられたスポーツを教材とする体育について、高等教育における身体的教養の涵養という視点からまとめられたものである。この点に本研究の独創性とインパクトを見出すことができる。

## (3) 今後の展望

UNESCO(2015b)の『International Charter of Physical Education, Physical Activity and Sport(体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章)』の内容や『持続可能な開発のための2030アジェンダ』の内容は、今後さらに詳細に検討すべき内容である。同じく『Quality physical education(QPE)』の「physical literacy」(UNESCO, 2015a)は、身体(的)リテラシーの概念を捉え直す上で重要な位置を占めていると考えられ、今後の研究課題として無視することはできない。

本研究では、研究期間中に起こった新型コロナウイルス感染症の蔓延により、当初に予定していた計画通りに研究が進まなかったことが悔やまれる。とりわけ、本研究で得られた知見を調査等により実際の教育現場に落とし込む作業ができなかったことは非常に残念である。これは今後の課題として留めておきたい。

### <引用文献>

- 小林寛道. 1988. 大学教育と保健体育科目(東京大学): 大学一般教育としての保健体育科目を考える. *体育の科学*. 39(1), 49-57
- 増田靖弘. 1987. 大学の体育を考える. *I D E・現代の高等教育*. 285
- 日本学術会議. 2010. *21世紀の教養と教養教育*. <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-tsoukai-4.pdf>
- UNESCO. 2015a. *Quality physical education (QPE): Guidelines for policy makers*. <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000231101>
- UNESCO. 2015b. *体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章*. <https://www.mext.go.jp/unesco/009/1386494.htm>
- 吉岡利忠, 福永哲夫, 橋本公雄, 小林勝法. 2010. 21世紀の高等教育と保健体育・スポーツ: 体育系学術団体からの提言. *大学体育*. 37(2), 141-160

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 荒牧亜衣, 佐良土茂樹, パトリック・グリュエネベルグ, 関根正美, 畑 孝幸	4. 巻 51
2. 論文標題 「主体としての身体」からこれからのスポーツを展望する	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育哲学年報	6. 最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋浩二	4. 巻 52
2. 論文標題 体育科・保健体育科を担当する教員の指導能力についての検討：教員養成課程における体育学の位置付けを捉え直すために	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育哲学年報	6. 最初と最後の頁 47-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田 啓, 中島早苗, 河鱈真世, 高橋浩二, 佐藤 和, 佐藤博信, 小谷恭子, 河鱈一彦	4. 巻 52
2. 論文標題 大学生による「体育」の考察に関する研究：「体育」自体を対象に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育哲学年報	6. 最初と最後の頁 41-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋浩二	4. 巻 69 (12)
2. 論文標題 [ つながり ] の教育としての体育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田もか, 高橋浩二, 河合史菜, 峰松和夫, 溝上 元, 森 小夜子, 若杉一秀, 岩本あさみ, 橋田晶拓, 宇野将武	4. 巻 7
2. 論文標題 体育科・保健体育科における運動観察能力のポイント化の必要性 思考・判断し、表現する能力の育成に向けた運動学習を目指して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 長崎大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田 啓, 高橋浩二, 中島早苗, 佐藤 和, 佐藤博信, 小谷恭子, 河鱈一彦, 畑 孝幸	4. 巻 53
2. 論文標題 大学生による体育・保健体育の考察：校種に着目して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 体育哲学年報	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋浩二	4. 巻 70 (6)
2. 論文標題 これからの体育で運動観察能力は育てられるのか？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高橋浩二, 宇野将武, 竹下伸太郎, 橋田晶拓, 山田周作, 久保田もか, 峰松和夫	4. 巻 21
2. 論文標題 「かわり合う子どもの育成」に向けた多様な動きをつくる体づくり運動の実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 長崎大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋浩二, 遠藤知里, 高村 直	4. 巻 -
2. 論文標題 ナヴィゲーション技術を導入したスキー学習の可能性 スキーにおける身体的リテラシーの育成に向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本スキー学会2022年度秋季大会講演論文集	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Hata, T.
2. 発表標題 The way of thinking in Zen philosophy and its educational application in Japan
3. 学会等名 2021 Taiwan International Conference of Philosophy of Sport (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Takahashi, K., Hata, T., & Morita, H.
2. 発表標題 Physical literacy as a learning content of university physical education
3. 学会等名 2021 Taiwan International Conference of Philosophy of Sport (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋浩二
2. 発表標題 体育授業を担当する教員の指導能力：教員養成課程における体育学の位置づけを捉え直すために
3. 学会等名 2021年度日本体育・スポーツ・健康学会体育哲学専門領域夏期合宿研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋浩二, 久保田もか, 畑 孝幸
2. 発表標題 大学における体育授業によって学習が可能な身体的リテラシー
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森田 啓, 中島早苗, 河鱈真世, 高橋浩二, 佐藤 和, 小谷恭子, 河鱈一彦
2. 発表標題 保健体育の評価：大学生による考察
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋浩二, 畑 孝幸
2. 発表標題 高等教育における学芸としてのスポーツの価値 成人 の教養の涵養に向けた大学体育の課題
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Despande, S., Pike, E. C. J., Hata, T., & Yamaguchi, J.
2. 発表標題 Body theory in the East and the West (Organized Symposia D-(5) )
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hata, T.
2. 発表標題 Body theory in Japan and its educational application
3. 学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋浩二, 久保田もか, 河合史菜
2. 発表標題 学校体育授業において学習が必要な運動観察能力の構成 学習成果としてのパフォーマンスの「見える化」
3. 学会等名 日本体育科教育学会第25回学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Ihigaki, K., & Hata, T.
2. 発表標題 School physical education as the education for intercorporeality: An investigation into "the corporeal generalized other" and the corporeal "we"
3. 学会等名 The 49th Annual International Association for the Philosophy of Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Morita, H., Takahashi, K., & Hata, T.
2. 発表標題 How should sport be at present?: War, COVID-19 and sport
3. 学会等名 The 49th Annual International Association for the Philosophy of Sport Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 森田 啓, 高橋 浩二, 中島 早苗, 佐藤 和, 小谷 恭子, 河鱈 一彦, 畑 孝幸
2. 発表標題 大学生による体育・保健体育の考察
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 森田 啓, 高橋 浩二, 畑 孝幸
2. 発表標題 大学生と考えるセカンドキャリア教育 体育・スポーツの専門課程の大学生を対象に
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第42回学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takahashi, K.
2. 発表標題 An aesthetic experience of my skiing
3. 学会等名 National Taiwan University of Sport Liberal Arts Centre Forum: Sport, Body, Arts, Aesthetics and Life ( (招待講演) (国際学会) )
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	高橋 浩二  (Takahashi Koji)  (20568224)	長崎大学・教育学部・准教授   (17301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	久保田 もか  (Moka Kubota)  (80744721)	長崎大学・教育学部・准教授    (17301)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	森田 啓  (Morita Hiraku)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関